高齢透析患者の通院状況と今後の課題

富樫明美、畠山淳子、吉田正春、金　浩子、鈴木香里、佐藤文子、菅野詔子
秋田組合総合病院 腎臓病センター

Circumstances of Attendance and Problems in Elderly Dialysis Patients

Akemi Togashi, Junko Hatakeyama, Masaharu Yoshida, Kohko Kon, Kaori Suzuki
Fumiko Sato, Noriko Sugano
Kidney Center, Akita Kumiai General Hospital

＜はじめに＞

当院は市内で透析を行える中心的施設で、秋田市の北部に位置し、７市町村より142名の透析患者を受け入れている。その内130名が外来通院しているが、65歳以上の高齢の通院者は57名で約半数を占めている。2000年６月病院の移転後、通院に不便を感じている患者が多くなった。又、家族の送迎、介護タクシーの利用者が多い事から、介護なしでは通院できない現状にある。

1999年の日本透析医学会の集計によると、導入患者の平均年齢が64.4歳であるが、当院では67.6歳であった。今後更に高齢者の透析導入が予測されることにより、通院透析が困難になることが必至である。そこで、現在外来透析を続けている高齢透析者及び家族に対し、通院状況の調査を行った。その結果、今後の課題を把握できたので報告する。

＜研究方法＞

１．研究期間：平成13年６月１日～10月30日
　　調査期間：平成13年６月１日～６月７日
２．対象：通院透析している65歳以上の高齢者57名
３．調査方法：記述式無記名のアンケートを用い１週間以内に回収
　　アンケート回収数　57名
　　アンケート回収率　100％
　　アンケート内容　・家族構成
　　・病院までの距離
　　・通院手段
　　・通院にかかる費用（１ヶ月）
　　・今後の不安
　　・介護状況
　　・市町村名

4．結果

当院に於ける外来通院透析を行っている患者は130名で65歳以上の高齢透析者は57名である。（図１）

高齢透析者を年齢別に分けてみると65歳～74歳が最も多く37名であり、80歳以上は３名で最高年齢は88歳である。（図２）

地域別では、秋田市内が最も多く77名、市外では53名であるが、中でも南秋田郡からの通院者は41名であった。（図３）

高齢透析者の地域分布は、秋田市が半数以上を占め32名で、南秋田郡21名、男鹿市４名であった。（図４）

通院距離の調査では、10km未満が33名と市内からの通院者であった。20km～30kmでは15名で40km以上では３名とも男鹿市からの通院者であった。（図５）

通院手段を見ると、家族の送迎が23名と最も多く、次いでバス、電車利用者は13名であった。又、自分で運転し通院している患者は10名である。介護タクシーを活用している患者は、８名と少ない。（図６）

１ヶ月の通院費用では、２万円以内は49名であり、２万円以上の患者では、市外からバス、電車利用者であった。１万円以内の患者では家族による送迎が主であった。（図７）

今後の不安についての調査では、複数回答であるが、病気に対する不安が最も多く46名、通院に対する不安が38名であった。その他介護や金銭面の不安も見られた。（図８）

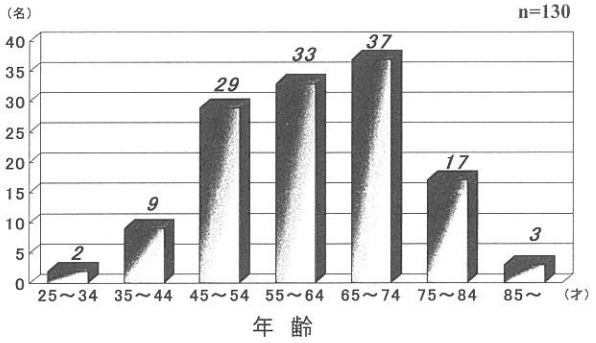

図１　血液透析患者の年齢分布

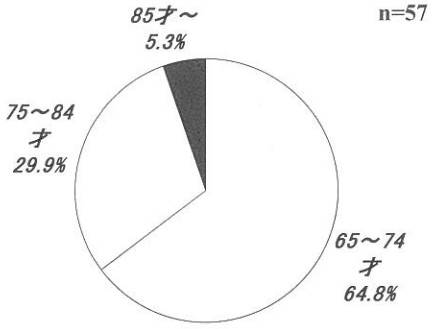

図２　高齢透析患者の年齢分布

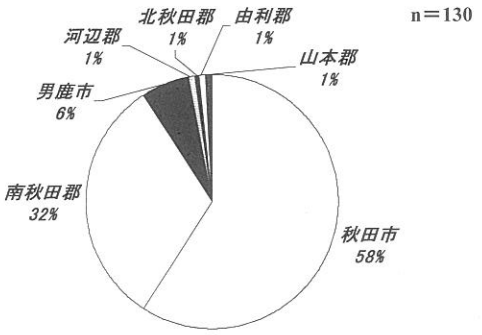

図３　血液透析患者の地域分布

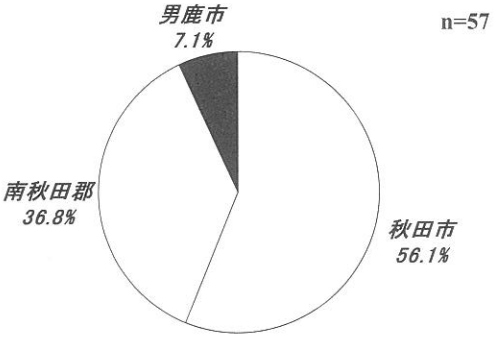

図４　高齢透析患者の地域別分布

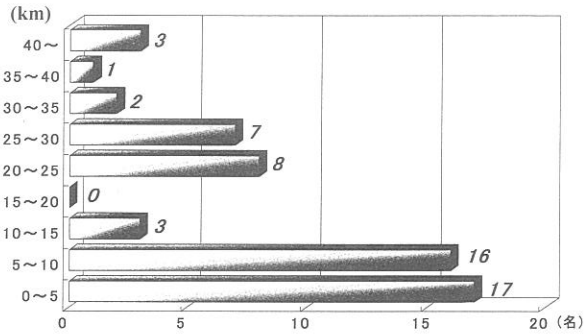

図５　通院距離

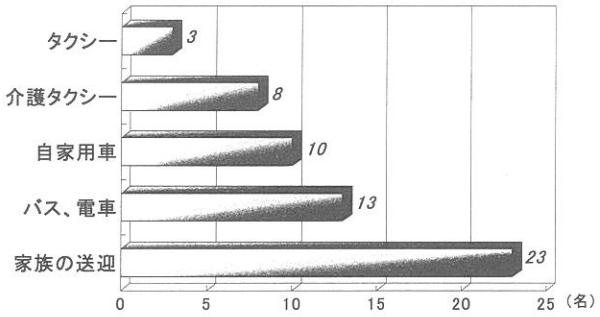

図６　通院手段

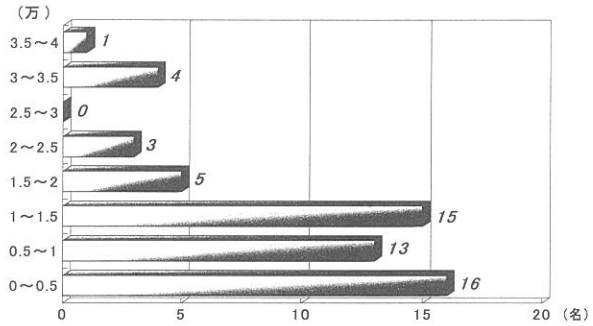

図７　通院費用（１ヶ月）

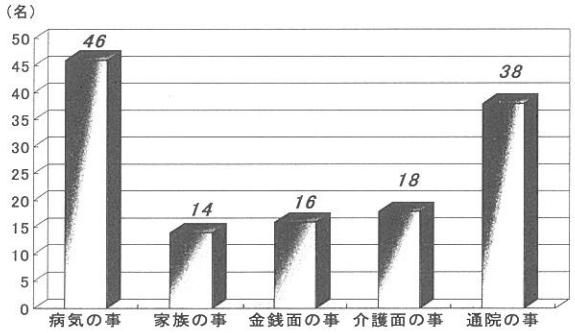

図８　今後の不安

＜考　察＞

当院に於ける透析導入年齢が年々高齢化し67.6歳と高く、市外からの通院者も増えており、通院距離に時間を要している。

調査内容では、自分で運転してきている患者は男性10名、平均年齢71.8歳と高齢であったが、自立心があり社会的に責任ある役割を果たしてきた人達と考えられた。しかし、透析が長期化することで今後、自力通院に不安が生じてくると思われる。

介護タクシーの利用者は８名で平均年齢からすると利用者は少ない。これは、家族の送迎で安心できる事や、通院することが自分の生活の一部となり習慣化されているのも理由の一つと考えられた。

通院費用に関しては、２万円以内が49名であるが家族の協力や公的扶助を受けていることで、金銭面に対する不安や負担が少ないと思われる。又、今後の不安に関して病気の事が46名と多いのは、今後病気がどの様な経過をたどり、いつまで外来通院できるのかという思いがあると考えられた。更に、通院に対する不安も38名と多い事から、外来透析を継続していくには通院手段の確保が重要と考えられる。しかし、一般の老人福祉の状況は確立されているが、透析者の通院、介護に対しては利用できる範囲が狭く、地域によっても差がある。今後、送迎者の変化や送迎方法に何らかの不都合が生じた場合は、社会資源が平等に活用できる様又、容易に受け入れてくれる生活施設などを検討していくことも今後の課題である。

＜結　論＞

1．通院者の57名中23名は家族の送迎が必要であった。

2．外来通院を継続していくためには、通院手段の確保が必要である。

3．透析者に適した社会福祉制度や施設の検討が必要である。

参　考　文　献

1）（社）日本透析医学：日本透析医学の統計調査から　臨床透析　1994：2：179-184

2）畠山貴恵子：退院困難な患者の在宅へ向けての家族への支援　臨床透析　1998：10：1701-1706

3）木田川典彌：超高齢透析患者の社会支援体制　臨床透析　2000：10：1889-1894

4）小松裕保　他：超高齢透析患者の通院援助　臨床透析　2000：10：1901：1904

5）関野宏：社会的側面から見た透析患者の状況と検討課題、対応策　臨床透析　2001：6：177-185

6）鶴谷優子　他：高齢透析者における通院方法の現況　第28回東北腎不全研究会予稿集2001：8：40